

主な取組み

天草経済開発同友会

40年のあゆみ

## 苓北発電所に関する要望書

九州電力株式会社による苓北発電所建設問題につきましては、日ごとにその関心が高まる中で何かとご苦勞のことと存じ上げます。私共、天草経済同友会は昭和52年9月本件が発表されるやそれが天草地域に与える影響がきわめて大きいとの認識から、関係者の方々よりヒヤリングを行い、それに関する知識の吸収に努めてまいりました。

昨年には苓北火電特別調査委員会を設置し、種々検討を行い、その結果を基に小論文「苓北発電所によせる期待と提言」を発表することに致しました。何卒本論文をご検討いただき、われわれの意図するところをお汲み取りの上、その促進方に格段のご配慮とご尽力を賜りますよう、茲に要望いたします。

昭和56年1月12日

熊本県本渡市南新町3番1号

天草経済同友会

会長 永 芳 黎 一



## 提言書より抜粋

はじめに

天草地域経済の発展を基本方針として、天草の企業55社により天草経済同友会を昭和50年1月設立した。以来今日まで経営情報の交換、経営セミナー、あるいは幹部社員研修会など企業体質の強化に努めるとともに、毎月の例会に折をみては県議団、市町長、市議団などをゲストに迎え懇談会を実施するなど政治と経済の協調を図ってきた。

昭和52年9月、苓北町に九電火力発電所立地構想が発表されるや、天草選出県議団、九電熊本支店長、苓北町長などからヒヤリングを行い、それに関する知識の吸収に努めてきた。その後、苓

北火電特別調査委員会を設置し、関係機関よりの各資料の収集、分析、検討を図るとともに、石炭火力発電所の視察をも行ってきた。

昨年12月、九電より環境影響調査の発表と発電所の建設申入れが行われたのを機に、われわれが現在まで調査検討した結果をまとめ、発表することにした。

もとよりわれわれは経済人の集団であり、農漁業、とりわけ漁業問題についてはきわめて不得手である上に、今回の調査でも関係漁業者よりの資料及び事情調査は非常に難しかった。特に漁業問題については微妙な段階にさしかかっているやに思われるので、敢て取り上げないことにした。

## 苓北発電所によせる期待と提言

昭和56年1月

天草経済同友会

天草経済開発同友会が作成した提言書

本論文の前提として、九電による環境影響調査の発表数値を是認した上で論旨であることば云うまでもない。その可否は熊本県など関係専門機関のチェックを待つほかはないと思われるからである。

苓北発電所設置問題を天草全体の問題としてとらえながらも、苓北町を中心に隣接1市2町を主体に、地域開発と振興のための経済的效果に焦点を絞って、そのメリット、デメリットを探りながら大胆な予測を試みてみた。本論文が発電所問題をとらえる上での一側面としての意義をいくらかでも認めて戴ければ幸甚である。

おわりに

電発立地の場合、環境に対して全く影響がないことはありえない。論理的にも無から有に転じる場合、そこに変化が起るのは当然のことである。苓北発電所立地の場合も、確かに自然が破壊され、大気や海水も幾分か汚染されることは間違いないことであろう。立地の是非を判断する場合、極論すれば、これらのマイナス面がまあまあ我慢でき、それがもたらすプラス面を考慮して、差引きどちらを取るかということであろう。いま、で各項目に亘り、そのメリット・デメリットおよび問題点を探ってきたが、メリットからデメリットを差引いても、まだかなりのメリットがあると判断した。それは云う

までもなく巨額な投資に依って、天草地域振興の起爆剤になると信じるからである。電力消費型の企業誘致や陶石の第2・第3次製品化の為めの工場計画など、たしかに地元苓北町の期待は大きく、数多くのビジョンを描いているようである。隣接する本渡市・五和町・天草町は電源三法交付金により直接財政に反映されるが、それ以外の天草の市町にも程度と時間の差こそあれ、その波及効果が起ると思われる。また国家的見地からみても、日本のエネルギー依存の分散化、すなわちエネルギーの脱石油化の一環としての石炭火力発電所計画でもありその立地は国策にそうすることにもなる。

また熊本県の電力需給の上からも、54年度の需要4,420百万kWhに対して、県内の発電量は、その20%程度の852百万kWhにすぎない。

苓北発電所が開通すれば、ゆうに電力自給県になりうるわけである。

先に述べたように、われわれの期待は、その巨大なプロジェクトによる経済的效果にある。そのためにも九電に対し、資材購入、労働者の雇用、工事の発注なども可能なかぎり、地元優先策を講じてもらいたいものである。

最後に九州電力に対して、漁業関係者との補償問題をはじめ地域住民との誠意あるコミュニケーションを図り乍ら、苓北発電所立地の促進方を要望する次第である。

# 天草進学塾青藍塾

天草経済同友会

青藍塾開塾趣意書

今日、世界170ヶ国の中で近代化を開花させ、その発展に余力を持つ日本は世界注視の的となり、その秘解明に諸外国の研究するところとなつてゐる。

その秘、即ち原因は明治以降に於ける教育投資にあつたことは、周知の認めるところである。明治の先覚者は、国家の興隆、近代化への原動力は教育にありとして情熱をもつて実行し、百年の大計のもとに今日の偉大なる所産を与えてくれたのである。

今日の私達は、この所産の継承者として二十一世紀に向かつて、改めて現状を見直してみる必要がある。

今、天草一円の高校生の進学状況は、その数において十年前をはるかにしのぎながら、第一志望大学への合格率は逆に半減し、浪人数はむしろ増加の現状にある。更に昭和45年頃を境に、中学卒業生の17%が郡外高校へ進学しており、内200名近くが公立高校を希望している。十余の県立高校を有する天草からの流出は、保護者の経済的負担はも

とより、私達には尚一層解し難いものといえよう。

九州各県はもとより大都市における地元高校卒業者の活躍はめざましい実情にありながら、この十余年、その潜在的能力を見出すことなく、多くの後継者を断つてゐる事は誠に慚愧の至りといわざるを得ない。

本来、天草の生徒は極めて優れた能力を有しながら、勉学の機会、切磋琢磨する場が少ないこと等を考慮して人材開発のための進学塾(青藍塾)を開講し天草の教育文化発展の一助に資したい。

何卒本趣旨ご理解の上、自主参加のもとに初志貫徹を切に願うものである。

昭和60年4月1日

天草経済同友会

会長 三角商治  
塾長 江崎虎六

## 日本経済新聞

### 天草で人材育成を

経済同友会 島外流出防止へ進学塾

天草の将来を担う人材いよいよ。熊本県天草上島、下島の企業五十五社で組織している天草経済同友会(会長・三角商治氏)が、地元の高校三年生を対象にした進学塾「青藍塾」を開塾することになった。二十八日に開塾式を開き、五月一日から授業を始める。地域経済団体のユニークな試みとして注目を集めそうだ。

塾は、天草両島の中間に位置する本渡市内に設ける。塾長は元県立天草高校長の江崎虎六氏。両島内の高校三年生と受験浪人を対象に一期生五十人を募集している。

三角会長は、「島外に進学した子弟は下宿しなければならず、父兄の負担が大変。塾は地元の高校を支えるために設ける。受験競争に油を注ぐという批判もあるが、我々は天草の将来を考えてくれる人材を地元高校から有る大卒に送り出したい」と話している。

塾の月謝は「教科につき三千円だが、一学期が出た場合は同友会で負担してこまめな調整」といふ。

天草経済同友会は、天草地域の振興、地域政治と経済の調和、人材育成の三つを目的に組織した企業団体。「地域への恩返し」の意味から進学塾による人材育成に取り組むこととした。

天草高校に赴任したのは昭和58年4月、28歳の時でした。天草高校は天草全島の中心校として誇りと伝統のある学校でしたが、当時は上級学校への進学に熱心だったとは言えなかったと思います。今でこそ下火になりましたが、教職員組合が強く、どういうわけか進学指導は競争心を煽るとして嫌われていたのです。

天草は地勢柄大半が島外に出ていくことになりました。島外でそのまま活躍するにしても、島に帰って来て天草を支えていくにしても、天草の人財育成は天草の繁栄・発展と表裏一体でした。そのことを考えれば、天草経済同友会が天草の人財育成に対して支援するというのは自然だったのかも知れません。外に目を向ければ、時代の流れから佐世保重工業が下火になり、不景気が佐世保市を襲った時、「勉強している者は飯が食える。」と、佐世保の各高校は学習合宿を始め、学校・保護者一体となつて進学実績向上に邁進している頃のことです。今でも同じことが言えますが、天草という特殊な土地柄において、いや、日本において、人財育成というのは最優先課題の一つなのです。熊本出身の経済人で、りそな銀行の再生に奔走された故細谷英二会長は、「バブル崩壊後のロスト二〇年で一番失っ

たものはリーダーシップ教育だよ。日本には人財育成が不可欠だよ。」と、お会いする度毎に仰つていたのが思い出されます。

さて本題に戻ります。正確な期日は覚えておらず、誰から言われたのかも忘れましたが、どなたからか、ある場所に出かけて行って欲しいと言われ、出向いて行くと、天草経済同友会の三角商治会長と吉永征輝幹事、大矢野高校長を退職なされたばかりの江崎虎六先生がおられました。他に同友会の方、高校の先生方が同席されていたかも知れませんが、残念ながら思い出せません。その時のお話は、前段で書かせて頂いた通りで、天草の進学実績向上のお手伝いをしたい、具体的には難関大学合格を目的とした塾を作ること、難関大学合格者にはお祝い金を贈ることでした。さらに、お話をお聴きすると、新たに作る塾での講師を引き受けてくれなにかと頼まれました。江崎虎六先生はご退職なさつていたので問題はありませんでした。私が、私は現職の天草高校教師であり、熊本県教育委員会は既に教職員の兼業を禁止していました。その旨をお伝えしお断りしたら、県からの了解は取れているから何とか引き受けました。経済同友会の人達はどんな

魔法を使つたのか、若い一教師にはびつくり仰天でした。さらに、授業をしてもらう以上、ただ働きはいかんと県の偉いさんからのお達しがあつていると。こんなやり取りの後、正式に塾を作ることがその場で決定し、私もお手伝いさせていただくことになりました。話はさらに盛り上がり、塾の名前を何にするかとなり、いろんな候補が出てきました。かすかな記憶ですが、当時の自民党で石原慎太郎を中心とした青嵐会をもじり、天草を舞台としたNHKの朝の連ドラの「藍より青く」にも因んで「天草青藍塾」と決まりました。

このような経緯で昭和60年にスタートした青藍塾を、平成元年の転勤までお手伝いさせていただくことになりました。塾の場所は吉永さんが手配された（場所は覚えていますが、住所は忘れませんでした）、同友会の事務担当の女性の方が授業のある日は、授業が終わる九時頃までお手伝いされていました。生徒は全員が天高の生徒で、ほとんどが国立大学を目指し、週に二回数学と英語の授業を夕方から受けていました。私の転勤後も講師は天高の先生が引き受け、天高の生徒達の夢の実現に向けて努力され、天草青藍塾は一〇年近く続いたと聞いております。

天草青藍塾は、経済同友会の天草に

対する思いと、天草の生徒は大きな可能性を持つており、夢をかなえてあげたいという教師の思いが一つになつて動いて行つたと思います。その思いがあつたればこそ、異例の県の下承があり、公立高校の教師が同友会が設立した塾で生徒を教え、学んだ生徒達は大きく飛翔していったのです。このような稀有な塾は二度と登場しないでしょう。教育は、国の礎であり、人が「よく生きる」土台を作るものです。単に大学進学実績を上げることには溺れることなく、地域と一体となつて「人づくりの教育を実践することが、地方創成の近道かもしれません。そういう意味で、天草経済同友会が30年も前に創られた天草青藍塾は画期的なことでした。地方創成・地方教育の在り方が大きく問われている時代に、いいお手本が天草の教育の歴史の中にあることは大きな財産だと思えてなりません。

寄稿者



教育コンシェルジュ 福本真也氏

現在  
学校法人壺溪塾 英語  
科講師、教育コンシェルジュ  
エ碎琢 代表取締役 熊本  
市在住

# 天草を考え天草を創る地域シンポジウム

## 「地域づくり住民主体で」 天草 シンポ実行委を結成



天草シンポの開催を発表する実行委員たち

リゾート地、大草広帯、クオが日中押しの天草の地  
二県界をなす大型プロジェクト 城づくりを住民主体にやっ

ていこうという「天草を考  
え天草を創る地域シンポジ  
ウム実行委員会」が天草経  
済同友会、天草本郷青年会  
議所、天草観光協会などの  
有志で結成された。第一回  
の討論会を四月二十一日、  
第二回を六月九日、第三回  
を九月に催して生活に密着  
した問題を語る。

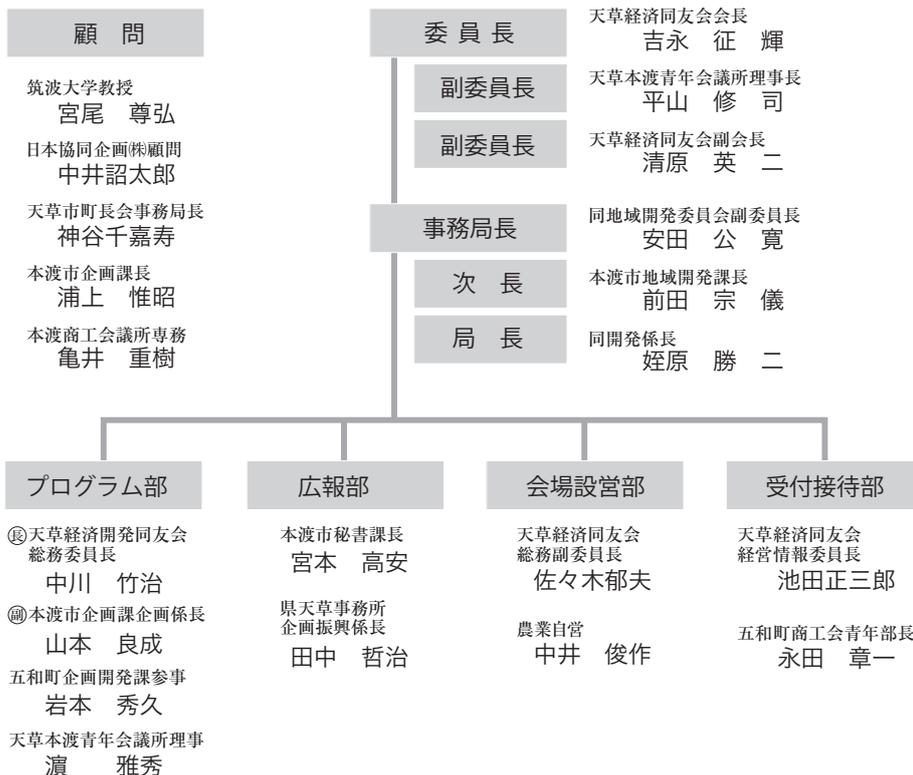
実行委によると、リゾー  
トや空想建築などはいずれ  
も行政ベースで進んでいる  
が、主役の地域住民の意図  
は乏しく、開発の方向性も  
見えにくい。「精進前に地域  
の主体性を磨き、自然的な  
視野で天草おもしろを掘ろう  
という。

一回目は午後一時半から  
同七時まで、本郷市広瀬の  
本郷神社参集館（24・3  
7・5）で開く。一部が筑  
波大教授・宮尾尊弘さんの

基調講演「二十一世紀への  
地域づくり——リゾートの  
未来像——」、二部はパネ  
ル討論「いま天草に問われ  
ているもの——天草の早期  
ビジョンと活性化——」に  
ついて熊本大教授・佐藤誠  
さん、エコロジスト中井俊  
作さん、経済同友会の木山  
勝彦さんが討論。三部は  
講師、パネリストを囲む座  
談会。参加費は二千円。  
申し込みは、天草経済同  
友会内の天草考創シンポ実

読売新聞 記事より  
(平成2年3月9日)

### 天草考創シンポ実行委員会組織 (平成2年1月17日発足)





# 天草を考え 天草を創る 地域シンポジウム

## PART I

今や21世紀を目前にして、国際化、都市化、価値観の多様化、余暇時間の増大といった大きなうねりの中で、住民一人ひとりがそれによって立つ基盤をどのように構築するかという、新たな転換期を迎えております。

こうした状況下において、住民参加のもとに地域の特色を活かした自主的・主体的な地域づくりのフレームワークをどの様につくり上げていくか、大きな課題であります。

天草においても、架橋建設以来の大型プロジェクトを目前にして、島民は大きな期待を寄せる一方で、これから自分達のまち、生活形態はどうなるのかといった夢と現実が交錯する中、県都からの即分構想、リゾート基地の建設、天草空港の建設、日県架橋等の大型プロジェクトに対し、地域住民としてどう参画し、生活に密着したまちづくりを進めればよいか、将来の姿を模索しております。

こうした中で、有志による「天草考創シンポ実行委員会」を組織し、シリーズによるシンポジウムを開催することになりました。企画にあたっては、筑波大学の宮尾先生に懇意なご指導を賜り、産・学、行政の連携により天草の将来を展望した地域発展の道を共に創り出す場が実現することになりました。

天草の新しい夜明けの実現のためには、解決すべき課題が数多くありますが、ご参加いただく多くの方々の英知と創造力が、有効な推進力となることを期待してやみません。皆さんの参加を心から歓迎します。

日時 1990年4月21日(土)  
1:30PM~7:00PM

場所 本徳神社参集殿  
本渡市本渡町広瀬  
☎0969-24-3765

お問い合わせ先  
天草考創シンポ実行委員会  
本渡市南新町3-1 西永ビル4F  
天草経済同友会事務局内  
☎0969-24-3325



「天草はすばらしい。これからの天草づくりを皆さんと一緒に考えたい」と熱く語る宮尾教授

### 第1部 基調講演 ……1:30PM~2:35PM

#### 『21世紀への地域づくり』 リゾートの未来像

国際的な視野から、地域づくりの最新動向と、リゾート開発の背景・課題を探り、これから求められる地域づくりとリゾートの未来像は何かを深く掘り下げる。

講師 宮尾 尊弘 (筑波大学教授)

1943年東京都生まれ、66年慶応大学経済学部卒、74年マサチューセッツ工科大学で経済学博士号取得。トロント大学助教授、南カリフォルニア大学教授などを経て、95年から現職。著書に「ポストバブル経済の時代」「現代都市経済学」都市と経済のニュー・トレンド」など。

### 第2部 パネルディスカッション ……2:45PM~4:45PM

#### 『いま天草に問われているもの』 ——天草の長期ビジョンと活性化—— パネリスト



佐藤 誠  
(熊本大学教授)



松脇 達朗  
(熊本県企画開発部企画課長)



中井 俊作  
(エコロジスト)



木山 勝彦  
(天草経済同友会)

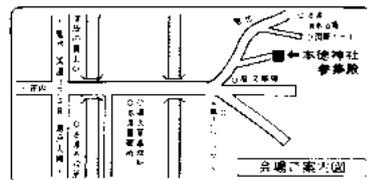
コーディネーター 宮尾 尊弘

### 第3部 講師パネリストを囲む懇談会 ……5:15PM~7:00PM

参加費 2,000円 (シンポジウム参加者の方で希望者)

主催 天草考創シンポ実行委員会  
後援 天草経済同友会・(社)天草本渡青年会議所・天草観光協会  
本渡商工会議所・天草地域航空振興協議会  
天草地域大規模リゾート基地建設促進期成会  
協力 熊本県・本渡市・五和町

※シンポジウムに関するご意見・ご希望をお聞かせ下さい。  
※当日は混雑のため駐車場スペースの確保ができない場合もございますので、ご配慮願います。



# 天草おこしで討論

地域シンポに400人

## 開発の在り方提言

「天草を考えた天草を創る」地域シンポジウムが、11日午後、時平から本館五本館前広場の本館本社で開かれた。天草本館青年会議所など地元有志が主催で、約400人の天草経済人が主メンバーの天草を



約400人が参加したシンポジウムの会場

創シンポ実行委員会委員、参加者、第一部はリゾート吉永雄輝、天倉経済学研究会の専門家、宮尾尊弘、会長が主催。筑波大教授が「21世紀リゾート、開発対象地区への進出づくり」と題して、地権者や地域住民のほか、基調講演。第二部では「いま天草に與・本館市など天草郡市の行政担当者など約400人が開かれていたもの」をテーマとして

シンポジウムでは同日の問題提起や提言を受け、今後九月までに3回のシンポを開催。天草おこしの具体的な方向を提示していく計画。

本山氏は、交通体系の整備促進で全局的な振興策を一を強調。松尾氏は「天草振興への理解」を訴えた。これを受け会場から「草の根リゾートの開発主体はどなたなのか」「行政が主張する策客視点としてのリゾートはなぜ必要か」などの疑問や意見が出され、約1時間わたって熱心な討議が交わされた。

第二部では「いま天草に與・本館市など天草郡市の行政担当者など約400人が開かれていたもの」をテーマとして、本山氏は「交通体系の整備促進で全局的な振興策を一を強調。松尾氏は「天草振興への理解」を訴えた。これをを受け会場から「草の根リゾートの開発主体はどなたなのか」「行政が主張する策客視点としてのリゾートはなぜ必要か」などの疑問や意見が出され、約1時間わたって熱心な討議が交わされた。

シンポ実行委員会の委員、参加者、第一部はリゾート吉永雄輝、天倉経済学研究会の専門家、宮尾尊弘、会長が主催。筑波大教授が「21世紀リゾート、開発対象地区への進出づくり」と題して、地権者や地域住民のほか、基調講演。第二部では「いま天草に與・本館市など天草郡市の行政担当者など約400人が開かれていたもの」をテーマとして、本山氏は「交通体系の整備促進で全局的な振興策を一を強調。松尾氏は「天草振興への理解」を訴えた。これをを受け会場から「草の根リゾートの開発主体はどなたなのか」「行政が主張する策客視点としてのリゾートはなぜ必要か」などの疑問や意見が出され、約1時間わたって熱心な討議が交わされた。

シンポ実行委員会の委員、参加者、第一部はリゾート吉永雄輝、天倉経済学研究会の専門家、宮尾尊弘、会長が主催。筑波大教授が「21世紀リゾート、開発対象地区への進出づくり」と題して、地権者や地域住民のほか、基調講演。第二部では「いま天草に與・本館市など天草郡市の行政担当者など約400人が開かれていたもの」をテーマとして、本山氏は「交通体系の整備促進で全局的な振興策を一を強調。松尾氏は「天草振興への理解」を訴えた。これをを受け会場から「草の根リゾートの開発主体はどなたなのか」「行政が主張する策客視点としてのリゾートはなぜ必要か」などの疑問や意見が出され、約1時間わたって熱心な討議が交わされた。



シンポジウムプログラム



宮尾尊弘教授

九〇年代の地域おこしシンポジウムは地域の問題だ。題意識、取り組みが必要。そのためにイミタジックな発想の転換が必要になる。これまでも地域と関係が、ある口元が、と中央になっている。天草は東京から見れば、遙遠な

### 宮尾・筑波大教授の講演要旨

## 発想の転換必要

リゾート開発  
自然を楽しむ立場で

重要なことは、地味特性を創出すること。地域特性とは、在るものでなく、人、モノ、カネに情熱を注ぎ合わせる。創るものだ。地味づくりに地域おこしの最終的な目的は、生活を楽しむための

日本はすべし。しかし日本ではなく、南方、両等、といの西海として見ると、長う新しい状況も生まれる。崎、鹿児島、沖縄の中心。天草には自然が豊富だが、さらに韓国、中国、台湾、それだけでは競争には勝て東南アジア、沖縄など国をない。自然を楽しむ人の立場で有効な活用方法を探り、開発と環境の調和を図っていくべきだ。



# 天草を考え天草を創る地域シンポジウム

## PART II

シンポジウムは、明るく、楽しくという筑波大・宮尾尊弘教授のリードにより「天草方式への第一歩」がスタートしました。

さきのPart I では、広く産・学・行政参加のもと率直な意見の交換が行われ、国際的発想への転換、環境創造型の地域開発、魅力ある田園文化の創造など、住民の自発的参加促進が強く提唱されました。

そこで、このシンポジウムをさらに有効な地域づくりの場とするため、今回は「地域開発と土地問題、環境問題」にスポットをあてグローバル(国際的)な立場からの提言と、天草地域の住民の視点から活性化への具体策を探りたいと考えています。

講師の先生も、国の政策決定に関わりの深い方々であり、農林・水産・商工界はじめ、行政関係者、また次回に予定しております「天草考創・討論会」への参加者には又とない機会であります。

皆さんの参加を心から歓迎します。

日時 1990年6月9日(土)  
10:00～15:30

場所 本徳神社参集殿  
本溪市本渡町広瀬  
☎0969-24-3755

お問い合わせ先  
天草考創シンポ実行委員会  
本溪市南新町3-1 吉永ビル4F  
天草経済同友会事務局内  
☎0969-24-3325



### 第1部 『国際的視点からみた 自然保護と地域開発』

10:00～12:00

講師 石 弘 之 (朝日新聞編集委員)

年代から朝日新聞の科学部、外務部記者として環境問題を担当。アメリカに4年間、アフリカに1年間の特派員生活を経験したのをはじめ、中南米、東南アジアなど世界各地の環境問題を取材。著書に「絶ぼまれる地球」「絶ぼまれる森林」などがある。国連環境計画特顧問。

ブレイク 12:00～12:45  
中食は会場で販売いたします。  
(ご希望の方はご入場の際、受付にお申し込みください)



### 第2部 『グローバル化時代の 地域開発と環境問題』

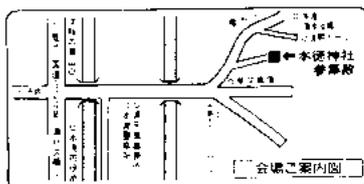
12:45～15:30

—— 頭脳・資源・資金の活用による天草の活性化を ——

講師 宮尾 尊 弘 (筑波大学教授)

1943年東京都生まれ。'66年慶応大学経済学部卒。'74年マサチューセッツ工科大学で経済学修士号取得。トロント大学助教授、南カリフォルニア大学教授などを経て、'85年から現職。著書に「ポスト・石油時代の現代都市経済学」「都市と経済のニュー・トレンド」など

■参加無料



主催 天草考創シンポ実行委員会  
後援 天草経済同友会・(社)天草本渡青年会議所・天草観光協会  
本渡商工会議所・天草地域航空振興協議会  
天草地域大規模リゾート基地建設促進期成会  
協力 熊本県・本溪市・五和町  
※シンポジウムに関するご意見・ご希望をお聞かせ下さい。  
※当日は混雑のため駐車場スペースの確保ができません場合も  
ございますので、ご配慮願います。

# 「人間回帰型リゾートを」

## 天草を考え創る地域シンポジウム第2弾

### 「豊富な魚活用しては」

専門家2氏が講演

住民の意識から天草の活性化を促す「天草を創る」地域シンポジウムⅡの「二回目」の集まりが九日、本港市で開かれた。地元経済界や天草本港青年会議所などで行くる実行委員会の主催。二人の専門家が環境保全と地域開発という、相反する問題を掲げ、対峙した。約三百人の参加者が熱心に耳を傾けた。

まず、国連環境計画特別顧問を務める朝日新聞社の石坂之嗣氏が「国際的視野から見た自然保護と地域開発」とのテーマで講演。

緑の減少に伴う気象の砂漠化の進行状況なるスライドを交えながら説明した。「経済発展

による開発は、地域をある程度で奪奪人の心をいやす人間回帰型のリゾート開発を進めていく」と述べた。

「世界的な推進ブームの中で、豊富な観光資源の魚を生かさない手はない。キラシタをどう使うか、という問いを投げかけた。

「開発と環境問題を正対して思われがたが、ゴルフ場では規制強化をするなどして環境に負いさせる。賛否両論でも効果的で、持続可能な開発の形を模索している不動態の脱却をどうするか、という問いを投げかけた。

▲平成2年6月10日 朝日新聞記事

### 天草リゾート 第2回シンポジウム

「天草を考え天草を創る」シンポジウム」が九日、本港市本郷町の本郷神社藝集殿で開かれた。地元の若手経済人らで構成する天草考察シンポジウム実行委（委員長、吉永直輝・天草経済同友会会長）が四日から三回シリーズで実施しており、今回が二回目。

リゾート開発対象地区の住民や農・天草都市の議会、行政担当者ら約四百人が参加。国連環境計画特別顧問の石坂之氏（朝日新聞記者）が「国際的視点からみた自然保護と地域開発」、リゾート問題の専門家、宮尾輝弘・筑波大教授が「グローバル化時代の地域開発と環境問題」と題してそれぞれ講演した。

この中で石氏は、全世界で進行する森林など自然破壊と砂漠化、地球温暖化の深刻な現状を紹介。地域開発の方向として「自然の生態系に逆らうゴルフ場などレジャー型でなく、環境と調和した生活の場として位置づけるべきだ」と指摘した。

宮尾氏は「開発と環境保全の両立が基本」とした上で、地域特性を生かした開発と同時に、自然の現状を正しくとらえるための環境調査の必要性を強調。また「不動産の借長や証券化による資金調達方法を紹介しながらリゾートオフィス誘致などを提言した。

▲平成2年6月10日 熊本日日新聞記事

な問題を講義すれば、巨大資本に頼らずに、地域の人がその土地に合った開発を進めていくことが可能だと断言した。

「環境に優しいゴルフ場は、自然の生態系を壊さないように、石坂さんの意見を参考に、天草本港がどうするか、という問いを投げかけた。

「環境に優しいゴルフ場は、自然の生態系を壊さないように、石坂さんの意見を参考に、天草本港がどうするか、という問いを投げかけた。